

# Noisette Press

現地在住ライターがリアルなパリをお届け

Mai 2026  
Numéro 148



J'attends ta lettre avec impatience.  
手紙を心待ちにしています  
photo by Saori

## Parisien 突撃インタビュー

今月のお客さま **宮 白羊さん**

制作は朝から夜まで、  
時間をかけて「良いもの」を

——パリ・ベルヴィルで活躍する日本人デザイナー

ファッションの最前線であるパリにアトリエを持つ日本人デザイナーの宮白羊さん。「HAKUYO MIYA PARIS」のブランドを持ち、レディースのプレタポルテ（高級既成服）を一人で制作し続けて今年で10年の節目を迎えます。パリでのお仕事の話、服飾専門学校時代から現在までを伺いました。



### 20点中5点だった 服飾専門学校時代

#### ◆フランスに来た経緯は？

元々ファッションは好きで、大学時代はバイトでアパレルの販売員をしていたんですがつまらなかった。それならデザインをやりたいな、どうせなら海外行こうと。ファッションの留学はパリ・ロンドン・ミラノと限られていますが、せっかくだから英語以外の言語が学べる場所にしたいな。パリに憧れがあったわけでもなくて、イメージ的にミラノよりパリかなという感じで決めました。

#### ◆知らない言語での学生生活はいかがでしたか？

本気でやればなんとかなりました。僕の母がロシア語の通訳で、父も写真家で海外にいろいろ行っていて、言語に強い二人に言われたのが、日本人とつるまないこと。最初の半年間はツールズにいましたが、驚くほど英語が通じない。そうすると、まず伝えられるかどうか第一。伝えようとするれば、だんだん友達もできますし、日常会話の上達は早い気がしますね。文法は後からでもいい。

#### ◆パリの服飾専門学校時代は大変でしたか？

厳しかったですね。言葉ができるようになったと言っても、専門学校にいたのは10代～20代前半のフランス人の子ばかり。その中で喋ったり聞いたりするのは大変です。それと元々服飾を勉強してきていないので、専門用語が全然わからない。

何をやるにも点数をつけられ、隣で10代の子は20点満点中8点だったと泣いてて、僕は5点だったことも(笑)。

#### ◆どうやって乗り越えたんですか？

完璧に言葉を理解することに注力するよりも、人より時間をかけていいものを作るようにしたんです。フランスの学校は面白くて、例えば日本では鉛筆でという指示が出た時に鉛筆以外を使ったら点数がつかない。でもフランスは意外にそれが通ったりする。先生を納得させられれば良い。そういう中でいいものを作ることにシフトしたら、点数が上がってきた。課題も多くて朝までやって終わらなかったこともありましたが、でもやりたいことが見つかった実感はありましたね。スタージュ（研修）も含めて学校に4年通い、その後フリーランスで働きながら自分のブランドを立ち上げるまで4年かかりました。

### 「布」が「服」になる すごさと面白さ

#### ◆デザイナーの1日を教えてください。

朝からずっと作ってますよ。朝起きて、住んでいるベルヴィルのカフェでエスプレッソを1杯飲んで、近所の人と井戸端会議をして。あとはずっとアトリエで制作ですね。生地を買いに行ったり外出もありますけど、基本は制作。手を止める暇がないので、手を動かしながら次のことを考えている。普段は夜の9時10時頃まで、基本7日間休みなしです。友達に飲み誘われた時には行けるように先に仕事を進めておくんです(笑)。

#### ◆パリでこの仕事をする意味は？デザイナーを目指す人にアドバイスはありますか？

結局、パリがファッションの最前線なんです。洋服はどこでも作れますけど、もし何か本気で勝負したいなら結局ここなので、残れるうちは残ろう

かなと思いますね。どんな状況でも続けていれば勝ちだと思います。諦めずに続ければ、奇跡は起きないかもしれないけど、続ければ続けるほど可能性は上がるじゃないですか。

#### ◆仕事をしていて一番嬉しかったことは？

家族や知り合いが気に入って買ってくれるのありがたいけれど、完全に僕のことを知らない人が僕の服を手にとって着ているのは、やっぱり嬉しいですね。そういうお客さんに支えられているなと思っていますよ。

それに、洋服を作るのは楽しくて、商品というよりは、作品として作っている感じです。すごくシンプルな話ですが、布がちゃんとした服になるってすごいことだと思うんです。それが自分の手でゼロからできるのは、今でもすごいなと思いますね。

#### ◆これからやってみたいことはありますか？

今年はブランド設立10周年なので、6月に東京でショーをやるんです。これを機に、年に1回くらいはショーができたと思いますね。今回はスポンサーに音楽レーベルもついて演出も入っているので、いろんな方に楽しんでもらえるかなと思っています。

**Hakuyo Miya Paris POP-UP STORE (大阪)**  
2026年5月19日(火)～5月24日(日) 会場: KAINO 梅田店 2F (阪急「大阪梅田駅」より徒歩6分)

**Hakuyo Miya Paris 10th Anniversary Show / TOKYO COLLECTION 2026**  
2026年6月6日(土) 会場: Spiral Hall 青山(東京メトロ「表参道駅」B1出口前、またはB3出口より徒歩1分)

## 毎週土曜日あさ9時30分から、テレビ朝日で放送。 tv asahi



食材ひとつに、多彩なドラマ。  
毎週土曜日に放送中の「食彩の王国」は、身近な「食材」たちが主役。さまざまな食材が織りなす食文化の歴史や産地の風土…。そこに流れる時間をひも解くことで、人と食材のかかわりを探っていきます。

# 食彩の王国

語り 栗原丸ひろ子  
番組ホームページ [www.tv-asahi.co.jp/syokusai](http://www.tv-asahi.co.jp/syokusai)

# マダム愛の わたくし ミュラン

第148回

## 名門ホテルの中にある著名人達に愛され続けている老舗レストラン

**パ**リ8区、モンテーニュ通りに佇む老舗レストラン「Le Relais Plaza」。高級メゾンが建ち並ぶこの通りは、パリでもひととき華やかな空気が流れる場所です。名門ホテル「プラザ・アテネ」の中にあるこの店は、長年にわたり多くのセレブリティや文化人に愛されてきたことで知られています。赤いオーニングの入り口をくぐると、クラシックで優雅な空間が広がり、自然と特別な時間が始まるような気がします。廊下にはエリザベス・テイラーやイヴ・サンローラン、トム・ハンクスやアラン・ドロンなど、この店を訪れた著名人の写真が並び、気持ちが盛り上がります。

この日のお目当ては、名物のビーフタルタル。価格は48ユーロと少し贅沢な一皿ですが、スタッフがワゴンをテーブルまで運び、卵黄やケッパー、ハーブ、マスタードなどを加えながら、目の前で丁寧に仕上げしてくれるのが嬉しい。味付けは「もう少しマスタードを」「ケッパーは

控えめに」といった細かなリクエストにも応えてくれ、自分好みの味が楽しめます。

出来上がったタルタルはボリュームたっぷり。驚くほどなめらかで新鮮で、肉の旨みがやさしく広がる上品な味わいでした。付け合わせのフレンチフライとの相性も抜群です。ソムリエがセレクトしてくれた赤ワインと合わせるとその美味しさがさらに上質に。大満足のひととき。華やかな空間と心地よいサービスの中で味わう贅沢な一皿を味わう時間は、食事を越えた大切な思い出になるような気がします。そんなパリらしい魅力を感じられるレストランでした。

**A.** パリを代表するホテル「プラザ・アテネ」。パリのラグジュアリーホテルを象徴する存在。 **B.** レストランへ向かう途中の廊下には、これまで訪れた著名人たちの写真がずらり。 **C.** 店内は落ち着いた雰囲気、とても居心地のよい空間。 **D.** 名物のタルタルステーキは、目の前で作られていく様子を眺めているだけでも、自然と気持ちが高まります。 **E.** 味はもちろん、ボリュームもたっぷり。また食べに来たくなるタルタルステーキでした。

**今月のハート**

料理 ♥♥♥♥♥  
ドリンク ♥♥♥♥♥  
サービス ♥♥♥♥♥  
雰囲気 ♥♥♥♥♥  
コスト ♥♥♥♥♥

**Le Relais Plaza**  
25 Avenue Montaigne 75008 Paris  
01 53 67 64 00  
<http://dorchestercollection.com>

writer **マダム愛**

東京で知り合った私人男性に連れ去られ、気が付けばパリジェンヌとやらに。パリのレストランと生活、2つのブログを書いています。

blog **マダム愛の徒然パリ日記**  
<http://www.paris777.blog.fc2.com/>

blog **マダム愛のアパートの鍵貸します**  
<https://www.madameai.com/>



## 癒し系フランス男子ギョームの パリで茶柱 シルブプレ

ついに、Parisで茶柱を立てました

**B**onjour! 春のポカポカ陽気が数日続いたかと思うと、空一面が羊の牧場のようになり、急に肌寒くなるパリからお届け。旧店舗の時から引き続き来てくださるお客様、新たなお客様で有り難いことに Chanokiは賑わっております。パリ14区に新店舗を構えてから、お客様の層も変わりました。フランスや日本だけでなく、アメリカ・韓国・シリア・スペイン・台湾・中国・ドイツ・ベトナム等と多文化、そして幅広い年齢層のお客様が、日本茶を楽しんでいらっしゃいます。その内の一人、マダム・ダニエル(80歳)は「お茶を一つずつ、全種類ゆっくりいただくわ! 飲んだお茶を毎回の付箋にメモしてちょうだい!」と、とっても積極的!

娘も「パパの」ではなく、「わたしの」お茶屋さんが再オープンして意気揚揚。お店の隅っこで、茶托を茶杯代わりにしてお茶を注ぐ真似をし「釜炒り茶! はんず茶! 寒茶! 」と知り合いにそーっと出してくれます。メニューを持って、少し恥ずかしそうにトコトコ歩いて行ってお客様に渡した時もありました。うちの看板娘も大活躍です。それでは à bientôt!



まるでビールのような炭酸和紅茶

writer **ギョーム・ユルポー**

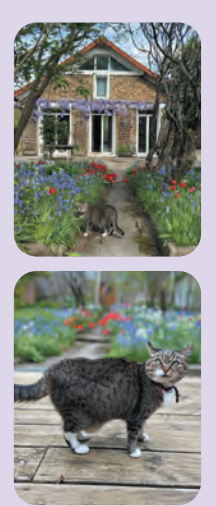
パリにある日本茶専門店「CHANOKI」店主。日本留学中に小笠原流煎茶道に出会い、その奥深さにハマる。お店では日本の農家から直接買い付けたこだわりの茶葉が味わえる。 **Instagram** @chanoki\_paris **HP** <https://www.chanoki.fr/>

## パリに暮らす猫パリにゃん・リリちゃんとゴキゲン指揮者キョーリのほのぼの生活

### パリにゃん通信

バカンス大国の憂鬱

**さ**て、いきなりですがよく聞く「フランス人はバカンスのために働いている」というのは本当です。夏のバカンスは有名ですが、実は5月のフランスもほぼ機能しません(笑)。なぜなら祝日がたくさんあり、それを週末に繋げて連休にするのがこの国の常識。5月は働く日数よりも休暇の方が多いという強者さえます。ちなみに学校は夏休み2ヶ月に加え、通常は1ヶ月半授業があり2週間の休みの繰り返しです。リリちゃんのお庭も花盛り私は公立音楽院の合唱団も指揮していますが、やっと練習が軌道にのって来たぞ!と思うとまた休みがやってくる…みたいなの(笑)。人生にバカンスは絶対必要ですが、フランスはちょっと多すぎるよ!と正直ちょっと思います(本当です)。まずは5月の連休を乗り切って6月の年度末コンサートまで駆け抜けよう! そうしたら夏のバカンスだ!!



リリちゃんのお庭も花盛り

writer **押田杏里**

日仏混合アマチュア合唱団「パリ・アブリコ合唱団」を主宰する指揮者。パリで猫のリリちゃんと旦那様と「今を生きる」をモットーに暮らしています。 **Instagram** @abricotp

## とびこめ! ミュゼのとびら

今更聞けないフレンチアート

エクスアン城が語る、フランスの「形ある遺産」と「無形の伝統」

パリから北へ15キロ、ヴァル＝ドワーズ県にある、国立ルネサンス美術館、通称エクスアン城。展示空間自体が、16世紀の貴族の邸宅であり、フランスルネサンスの生活・装飾文化に特化した専門の館です。城の始まりは、16世紀ヴァロワ朝の大貴族で元帥、アンヌ・ド・モンモランシー。ルネサンス美術の大パトロンでもあった彼が、自らの居館として、フランスルネサンス成熟期の粋を集めて建造した館です。その後、館は所有者の変遷とともに運命を大きく変えていきます。フランス革命を経て国家の所有となったエクスアン城は、19世紀には全く異なる役割を与えられることとなります。それは、ナポレオン1世によって創設された「レジオン・ドヌール教育施設 (Maisons d'éducation

de la Légion d'honneur)」の校舎としての利用です。レジオン・ドヌールとは、軍人や官僚、学者など国家に功績のあった人物に授与される勲章であり、その受章者の娘たちに教育を施すことは、「功績に報いる国家」というナポレオンの理念の一環でした。

こうした家庭の子女が寄宿制のもと集められ、厳格な規律とともに教育を受けました。かつて貴族の威信を体現した空間は、「共和国のエリートを育てる場」へと姿を変えたのです。この教育制度は、エクスアン校の閉鎖後もサン＝ドニエ場所を移し、現在でも続いています。歴代の制服も興味深く、現在は学年に応じて色の異なる飾り紐を肩につけ、ナポレオン期の象徴体系を思わせる端正なスタイルが特徴です。今回資料として紹介するのは、1865年当時の女子学生の写真です。入学の絶対条件は、レジオン・ドヌール受章者の子、孫、曾孫の女子に限る。それは差別ではなく、先人の功績を背景に持つ者が備える「ノブレス・オブリージュ」と言えるでしょう。形あるものだけでなく、無形の

アンリ・ラヴォー (レジオン・ドヌール女子教育院の生徒の肖像) Henry Lavaud - Portrait d'une élève de la maison d'éducation de la Légion d'Honneur, via Wikimedia Commons



伝統を守り続けることこそが、激動の歴史を歩んできたフランスを支える背骨となっているのかもしれない。

writer 妹尾優子

仏語教師の傍、仏文学朗読ラジオ「Lecture de l'après-midi」の構成とナレーションを担当。美術史 & 日本史ラブ。日仏の文学からアートまで深掘りする日々。

HP <https://note.com/tabichajikan/m/md750819c9bc7>

## 仏人添乗員リラの日本リラ散歩



自分のスマホにちょっと増えてきたSNSアプリ

### 利用はほどほどに

ここ最近、私の生活はあるものに縛られている。朝、昼、夜、一日何回もチェックしているSNSだ。元々はヘビーユーザーでもなく、インスタはある時からログインできなくなって以来数年放置していた。Youtubeだけは結構見ているショート動画が新しく登場してから時間のブラックホールに吸い込まれることもあったけど、SNSを何時間もスクロールすることはあまりなかった。しかしインスタに再ログインできるようになったきっかけにまたエンジンがかかり、昨年の11月にThreadsを使い始め、今年4月にXアカウントも作った。今までXとかやりたくなくて耐えてきたが、様々な情報キャッチアップが必要となり、ちょっと負けた気持ちでありながらもやむを得ず使い始めた。以前から自分の集中力に悩んでいたけど、SNSの利用増加で気が散るし、やることも進まず、仕事や私生活に支障を感じるぐらいさらにひどくなった気がする。

昨年から世界的に広がりつつある10代のSNS利用禁止の動きが今年フランスでも本格的に進んでいる。新学期である9月からの導入を目指して、15歳未満に「危険」と判断されたSNSの利用を禁止する法律が施行される予定だ。利用を禁止することが本当に解決策になるのかについてはもちろん、15歳以上であることを証明する、その年齢確認の実施方法も議論の対象になっている。プライバシーや個人データ保護の観点からも不安の声があがっているようだ。

SNSはコミュニティを通じていい人に出会ったり、共通の趣味を楽しんだり、様々な楽しい側面がある一方、最近は依存が強くなっていく実感があり、大人の自分にも規制が必要かも…。



writer リラ

東京で翻訳者としても活躍する30歳のフランス人女子。持続可能な社会の実現に向けての活動もする。趣味は編み物とペランダの植物の世話。

## トモクンのアレコレ、パリコレ、ナンザコレ〜

イッセイ・ミヤケのショーを音で彩った鬼オ二人

— マシュー・ハーバート & モモコ・ギル

3月に開催されたパリコレでは、たったの9つしかショーを見られなかったことを前回こちらで報告しましたが、そんな中で、とても嬉しかったことがありました。それはイッセイ・ミヤケのショーで、期せずして僕の大好きなアーティストの音楽を生で聴けたことでした。このブランドのショーではミュージシャンが生演奏をすることが多く、座席にあるプレス資料で事前にチェックするのだけれど、今回はすっかり忘れていました。まささな状態でコレクションを拝見。

街で偶々拾った石から着想を得たというデザイナーの近藤悟志は、腕を出せないニットアイテムなど、アーティストックな側面を強調し

つつ、ブランド創始者の三宅一生が80年代に発表した、女性の身体を象った樹脂製のビュスティエをほうふつとさせる漆製のビュスティエを合わせたドレスを発表。そのどれもがエレガントでモダンです。フィナーレでは、服と音楽が見事に融合し、徐々にコレクションを見て感動したのでした。

デザイナーを囲むでの取材があるというので、ランウェイ正面へ向かいましたが、音楽を演奏していたミュージシャンの顔が徐々に見えて来ました。もしかしたら、これは先週アマゾンでポチをした二人では?と思っただけの中。電子系音楽のレジェンドであるマシュー・ハーバートと、共作を昨年リリースし、ハーバートの協力の下、今年ソロ作を発表したモモコ・ギルのお二人でした。「モモコさんは日本人の血を引いているに違いない」と思い、日本語で「お二人のCDもモモコさんのCDも先週買いました」とアピール。そうしたら、普通に流暢な日本語が返って来ました。以来、2枚のCDはヘビーローテーション。特にフィナーレで演奏された『Fallen



Again』は、天にも昇るような高揚感を与えてくれます。ロンドンの音楽だけれど、パリコレ絡みということでお薦めしておきます〜。



writer トモクン

トモクンという名の45歳。在仏27年。ファッションジャーナリスト(業歴17年)は仮の姿で、本当はただの廃品回収業(業歴5年)。詳しくはブログ『友くんのパリ登の市散歩』にて。

blog 友くんのパリ登の市散歩 <http://tomos.exblog.jp>



第26回

世界一のパワースポット・セドナで天使と話す

**春** 休みはグランドキャニオンに行ってきました。途中世界一のパワースポットとして人気のセドナに寄ることに。

観光本によるとヒーリングをする人がたくさんいるらしく、「守護動物を教えてください人もいます」。守護霊じゃなくて？聞きたい！犬かな、猫かな？ガイドさんに聞いてみたところ「守護動物は見てくれないヒーラーさんはいました」乗りかかった舟です。お願いします！

大柄なピンクの服のおばさまに石屋さんの奥の個室へ案内され、通訳として若旦那、置いていけないので子ども二人も一緒にギューギューになってソファへ。全くスピリチュアルな世界に関心のない3人が真面目に黙っていられるのかドキドキしていると、部屋に入るなり長女がおばさまに「いつころやって死ぬとか言わないでね」とお願い。ジョジョの奇妙な冒険を見過ぎて何かに怯えている模様。この人は敵スタンド使いではないです。「そんなこと言ったことないわ〜」

との返事。ほっ。

そもそもヒーラーさんだと思っていたらリーダーさんらしい。まず「あなたの天使と今、会話しています」とニコニコしながら、私の頭上右上を見つめて「……あなたはとても頭のいい人ね」「え？」って家族3人みんな納得いってない顔。おい。変な空気になっている。「そしてクリエイティブ」「え？」また3人とも納得いかない顔。おい。長女はリーダーさんに英語で「そんなことない」天使に物申すのやめて。変な客に慣れているリーダーさんは「頭の良さもクリエイティブも色々種類があるから」と上手くかわす。「自営業をするわ」当たっている。天使スゴイ。「勘がいい。正夢を見るわね。夢を通じてだれかと通信している」ん？天使何の話？ていうか何語で話してる？

40分で59ドル。全体的によくわからない時間になったのはリーディングに理解の無い夫通訳が間に入ったせいか。ヒーラーじゃかったし根本的に癒してもらおうという態度が間違っていたと反省しながら、今度こそネイティブアメリカンっぽいパワーストーンで癒されたい〜とお土産屋さんでアクセサリーを物色。B'z稲葉さんが昔付けてたのに似てる〜！と手に取ると「made in china」。危なくネイティブチャイニーズのアクセサリー買うところでした〜。

writer 吉野亜衣子

ラジオ局を辞め、夫の留学についてパリへ。帰国後、日仏文化交流のための NOISSETTE を設立。2022年で設立10周年。2024年春よりNY在住。

HP <https://note.com/noisettepress>

podcast <https://podcasters.spotify.com/pod/show/cafenoisette>



▲手前の人の服が「サンセット」で粉らわしいですが、グランドキャニオンの朝日です。

▼西部劇風撮影。この馬絶対暴れないからロボかと思いましたが巨大な糞をしてました。



本ソムリエ・ムッシュブルドンの



国境なき記者、タンタン

**は** じめまして、元書店員のジャンマリーだ。このコラムではフランス語が原作の日本で刊行されている本を紹介する。少しでもフランスの書店を訪ねる気分を味わってもらえたら嬉しい。

日本を漫画の国だと言うならば、ベルギーはバンドデシネ(以下BD)の国とも言えるだろう。世界中で知られているキャラクターのタンタンがその代表だ。では、なぜフランス人がわざわざ他国のマンガを紹介するのか？ 実は同じ仏語圏のフランスとベルギーは「BD franco-belge」(いわゆる「白仏BD」)の深い絆で結ばれている。相手国の出版社でBD作家が活躍したり、お互いのBDを読んだりするわけ。ぶっちゃけ、タンタンがフランスのBDと思いついてフランス人も珍しくない。

隣の国でタンタンが馴染んだのは何となく想像がつくが、なぜ遠い日本でこれほど愛されているのだろう。まず、ジャポニズムの間接的な影響を受けた作者エルジェが描く「明確な線」(la ligne claire)が、日本で受け入れられやすかったためではないか。例えば大正時代に書かれた『正チャンの冒険』(織田小星作・樺島勝一画)のシリーズ後期

では同じような描き方が見られ、これが好意的な土壌を作る一因となったのかもしれない。

それにタンタンの冒険の国際性も人気の鍵となった。勢いよく走り回る陽気なタンタンが危機から人々を救うという素朴な雰囲気を保ちつつ、作者が各国を明確に描写する。作者は外交関係でピリピリしていた国を物語で架空に置き換え、現実味のある架空世界を描いていた。物語の表向き単純さ、そして描写される国への細やかな配慮は絵柄と同様に「明確な線」の手法を取り入れて、物語を可能な限り解りやすくするためだった。外国に対して好奇心が強い日本人読者には、昔も今も心躍る物語に違いない。

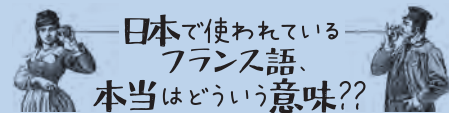


『タンタンの冒険』全24巻  
原題(Les Aventures de Tintin)  
エルジェ 作/川口 恵子 訳  
福音館書店

writer ジャンマリー・ブルドン

福岡在住のフランス人。福岡で仏語教室やフランスに関わるイベント企画を通してフランス文化普及に貢献する。Nautilus主宰。

Instagram @libr\_nautilus



アップリケ

日本だと「カバンにヒヨコのアップリケを付けました〜」みたいに切り取った布を土台の布にくっつける手芸の服飾用語だけど、「appliquer」というフランス語の「貼り付ける」「押し当てる」という動詞から来ています。その受動態がアップリケ。名詞はアプリケーション。携帯の「アプリ」も語源は一緒ね。フランス人は「これがアップリケだよ」と渡されても「貼り付けられた??」って混乱しちゃうかもね。

ノアセットプレス公式ポッドキャスト

「カフェノアセット第29回」より編集部が抜粋し要約。

編集後記

★渡越2年目をこえて、新たなベトナム

人との出会いが増えてきました。日本語をしゃべってくれる子もチラホラ。丁寧な言葉で話してくれるので、私のほうがしどろもどろです。日本語ムズカシイ…。(編集Y)★5月の第1週末のパリはパン祭り。ノートルダム大聖堂周辺で開催され、期間中は実演や試食があり、受賞歴のあるパンを購入する機会もあるとか。いい匂いだらうな〜。パティスリー巡りしたい！(AD.F)



今更聞けないリアルなフランスパリに住んだらこんなだった！



本当に話せる力をここで



フランス語会話学校  
エコールサンパ

03-3337-7933 / info@ecolesympa.com

表参道・阿佐ヶ谷・自由ヶ丘・オンライン

Noisette Press

À bientôt!

発行元: ノアセット東京オフィス

<http://www.noisette-press.net/>

編集発行人: 吉野亜衣子 編集: 小橋 桜子

アートディレクション: 藤原 結花(yap)

